

## 朝鮮の発展に積み上げた金日成主席の業績

アジア・チュチェ思想研究所副理事長  
スリランカ自力更生研究会委員長  
**W.A.ドゥミンドゥワルダネ**

過去、封建王朝の事大と外部勢力依存によって5千年の悠久な歴史と輝かしい文化を持つ朝鮮の国力は次第に衰え、自国の影響力のための列強の角逐戦の場となりました。

1905年から、朝鮮は日本の軍事的占領下に置かれるようになりました。

亡国の民の不遇な運命から朝鮮人民を救ってくれた方は、ほかならぬ金日成主席でした。

金日成主席は1912年4月15日、平壤の万景台で誕生して10代の幼い年に朝鮮の解放のための革命闘争の壮途につきました。

朝鮮革命が進むべき前途を模索する過程に主席はチュチェ思想を創始し、チュチェ思想の旗印の下で20年間、抗日革命闘争を勝利のうちに導いて1945年8月15日、朝鮮解放の歴史的偉業を成し遂げました。

解放された祖国へ凱旋した後、金日成主席は朝鮮労働党を創立し、土地改革をはじめ諸般の民主改革と重要産業国有化を実施し、男女平等権を実施し、正規武力を創建しました。

このような成果に基づいて主席は、1948年9月9日、東方の初の人民民主主義国家である朝鮮民主主義人民共和国を創建しました。

金日成主席は、帝国主義者が起こした朝鮮戦争で朝鮮民主主義人民共和国の自主権と尊厳を頼もしく守り抜きました。

主席はまた、戦後復興建設と社会主義革命を短期間に完遂し、数段階の社会主義建設を勝利へと導いて朝鮮民主主義人民共和国を政治における自主、経済における自立、国防における自衛の社会主義強国に転変させました。

「以民為天」を一生の座右の銘とした金日成主席の仁徳政治は、人民大衆中心の社会主義制度が朝鮮民主主義人民共和国に深く根を下ろすようにしました。

金日成主席は祖国統一の3大原則、全民族大団結の10大綱領、高麗民主連邦共和国創立方案をはじめ朝鮮の統一のための根本原則と方途を提示し、生涯の最後の瞬間まで祖国統一偉業に自身のすべてをささげました。

金日成主席は自主、平和、親善を朝鮮民主主義人民共和国の対外政策の根本理念に定立し、精力的な対外活動で共和国の国際的権威を高めました。

ほぼ半世紀にわたって国家首班、世界政治の元老として活動しながら、金日成主席は新しい自主時代を開き、社会主義運動と非同盟運動に不滅の貢献をしました。

金日成主席は1994年7月8日逝去しましたが、主席は社会主義朝鮮の始祖、人類の自主偉業の開拓者、朝鮮民主主義人民共和国の永遠なる主席に、そしてチュチェの太陽として朝鮮人民と世界の進歩的人民の心の中にとわに生きています。

金日成主席が切り開き、金正日総書記が発展させたチュチェの革命偉業は今日、金正恩総書記が継承しています。

金正恩総書記の精力的な思想・理論活動と賢明な指導によって、金日成主席と金正日総書記の革命思想は金日成・金正日主義に定式化され、朝鮮人民は自主の道、社会主義の道に沿って確信を持って真っ直ぐに進軍しています。

生涯の全期間、人民を天のごとく見なした金日成主席と金正日総書記の影像を奉じるように、人民を尊重する崇高な人民観を身につけて金正恩総書記は、人民の美しい夢と理想を現実化するために人民愛の政治を施しています。

今日、朝鮮人民は自力自強の原則に立脚して記念碑的建築物を数多く建設し、ひいては人民経済の主体化、現代化、情報化、科学化を押し進め、先端突破戦で奇跡的な成果を連日収めることによって、自立経済の威力をあまねく発揮できる明るい展望を開きました。また、科学、教育、保健医療、文学芸術、そしてスポーツ部門で目覚ましい成果を連続的に収めました。

今年、金正恩総書記の司会の下に行われた朝鮮労働党中央委員会第8期第6回政治局会議では、今年の太陽節(4月15日)と光明星節(2月16日)を金日成主席と金正日総書記が切り開き、前進させてきたチュチェの革命偉業を最後まで成し遂げようとする朝鮮人民の固い信念をいっそう固め、チュチェ110年代の10年を朝鮮式社会主義の全面的発展を成し遂げる勝利者の年代に輝かそうとするすべての党员と人民の高い熱意と革命的気概を世界に誇示する重要な政治的契機にしようとアピールしました。

金日成主席と金正日総書記は、全人類のための永遠な正しい指導指針をもたらした、われわれの時代の偉大な領袖たちです。

また、このめでたい契機を朝鮮人民とともに祝うのは、われわれにとって一つの大きな光栄、崇高な義務となります。

威力ある朝鮮労働党の指導の下、親しい朝鮮人民が今後も引き続き勝利だけ

を収めるものと確信しつつ、われわれは卓越したチュチェ思想で世界史に消しがたい跡を残した朝鮮民主主義人民共和国の永遠なる主席である金日成主席に再び最も崇高な敬意を表します。

終わりに、わたしは1982年、金日成主席の生誕70周年の時に訪朝して金日成主席と握手をしながらお言葉を交わした時を追憶するようになります。これは私の人生において永遠の追憶の一瞬間でした。